げんまい新聞

第11号　日々の在宅医療介護に役立つ知恵と情報をお届けします

製作者
玄米
クリニック
西原町翁長834
トムズビル2階
☎098-944-6663

終末期の「点滴」とどう向き合うか
～ご本人の「楽」を一番に考えるために～

ご家族が食事や水分をほとんど摂られなくなると、「点滴をしないと、お腹が空いて苦しいのではないか？」「喉が渇いて辛いのではないか？」と心配されるのは、ごく自然なお気持ちです。
「点滴はした方がよいのか、しない方がよいのか」これは、在宅医療の現場でご家族から最も多く寄せられるご質問の一つであり、正解が一つではない、とても大切な問いです。

なぜ、食べたり飲んだりしなくなるのでしょう？

まず知っておいていただきたいのは、人生の最終段階において、食事や水分を欲しなくなるのは、体が「旅立ちの準備」を始めた自然な変化だということです。
病気が治る見込みがあったり、体力が回復する見込みがあったりする時期には、点滴で栄養や水分を補うことは「治療」として非常に重要です。
しかし、終末期になると、体は徐々に活動を休止させようとします。内臓の働きもゆっくりになり、多くのエネルギーや水分を必要としなくなります。つまり、「お腹が空かない」「喉が渇かない」状態になっていくのです。これは、決して「飢えて苦しんでいる」状態ではありません。

点滴が、かえって「苦痛」になることも

レスパイト入院で利用されることが多いのが「地域包括ケア病棟」です。
ご家族の「楽にしてあげたい」というお気持ちで行った点滴が、かえってご本人の負担になってしまうケースがあります。

1．痰（たん）や胸水が増え、呼吸が苦しくなる

- 体が水分を受け付けなくなっているときに点滴をすると、その水分は血管から漏れ出し、肺や気管に溜まりやすくなります。その結果、喉がゴロゴロと鳴ったり、痰が増えて呼吸が苦しくなったりすることがあります。

2．体がむくんで、だるくなる

- 余分な水分は、手足や顔にも溜まり「むくみ（浮腫）」となります。体が重くだるく感じられ、楽な姿勢をとることも難しくなることがあります。

3．針を刺す痛みや、意識の混乱

- 点滴の針を刺す痛みはもちろんですが、意識がはっきりしない状態（せん妄）の患者さんが、無意識に点滴の管を抜いてしまうこともあります。それを防ぐために手を拘束しなければならなくなると、ご本人にとってもご家族にとっても辛い状況が生まれてしまいます。

点滴をしないこと ＝ 見捨てること？

決して、そんなことはありません。
水分や栄養を「入れない」という選択は、「何もしない」のではなく、ご本人が最期まで穏やかに過ごせるよう、余計な苦痛を取り除くための**「積極的な配慮」**です。
お腹が空く苦しみや、喉が渇く苦しみは、多くの場合、点滴でなくても和らげることができます。

私たちが代わりに大切にしたいケア

私たちは、点滴の代わりに（あるいは点滴と並行して）、以下のケアをとても大切にしています。

1．「お口のケア」をこまめに行う

- 喉の渇きの感覚は、実は「口の中の乾き」と大きく関係しています。点滴をたくさんするよりも、ガーゼやスポンジブラシを水で湿らせて、お口の中をきれいに拭ってあげる方が、よほど「喉が渇いた」という不快感を和らげることができます。唇にリップクリームを塗ってあげるのも良いでしょう

2．ご本人が望むものを、望むだけ

- もしご本人が「水が飲みたい」「ゼリーが食べたい」と意思を示されたら、安全に配慮しながら、スプーン一杯でも、一口でも、味わっていただくことを大切にします。

一緒に考えましょう

点滴をするかしないか、その量や内容をどうするかは、ご本人の状態、病状、そしてご家族のお気持ちによって、一人ひとり異なります。「一度始めたらやめられない」ものでもありません。
大切なのは、「この点滴は、ご本人の苦痛を和らげ、穏やかな時間を過ごすために役立っているか？」という視点を持ち続けることです。
私たち在宅医療チームは、ご家族の皆様のお気持ちに寄り添いながら、医学的な視点から最善の方法を常に皆様と一緒に考えていきます。不安なこと、迷うことは、どんな小さなことでもご相談ください。